

麦野 C

—— 第3次調査報告 ——

南八幡

—— 第6次調査報告 ——

1997

福岡市教育委員会

麦野 C

—— 第3次調査報告 ——

南八幡

—— 第6次調査報告 ——

1997

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内においても重要な地域として多くの人に知られています。

近年、市内南郊においては再開発が急速に進み、発掘調査の件数が増えつつあります。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は麦野C遺跡第3次調査、南八幡遺跡第6次調査の成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表す次第であります。

平成8年11月22日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

本文目次

第一章 南八幡遺跡、麦野C遺跡周辺の歴史的環境	(宮井善朗) 1
第二章 麦野C遺跡第3次調査	(宮井善朗) 3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査体制	3
3. 調査の記録	3
第三章 南八幡遺跡第6次調査の記録	
はじめに	(加藤隆也) 11
調査に至る経緯	11
調査の組織	11
南八幡遺跡群の既調査	13
調査の記録	13
1) 壕穴住居 (S C)	13
2) 土坑 (SK)	16
3) 小結	19

挿図目次

Fig. 1 調査区周辺の遺跡 (1/25,000)	2
麦野C遺跡第3次調査	
Fig. 2 調査地点位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3 調査区位置図 (1/400)	4
Fig. 4 造構配置図 (1/200)	5
Fig. 5 検出造構実測図 (1/60)	6
Fig. 6 各造構出土遺物 (1/3)	7
Fig. 7 包含層出土遺物 1 (1/3)	8
Fig. 8 包含層出土遺物 2 (1/3 * 1/2)	9
南八幡遺跡第6次調査	
Fig. 9 調査地点位置図 (1/1,000)	11
Fig. 10 造構配置図 (1/100)	12
Fig. 11 S C - 0 1 実測図 (1/40)	14
Fig. 12 S C - 0 1 出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig. 13 S C - 0 2 実測図 (1/40)	17
Fig. 14 S C - 0 3 実測図 (1/40)	17
Fig. 15 土坑 (SK) 実測図 (1/40)	18
Fig. 16 S C - 0 3 出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig. 17 SK - 0 4 出土遺物実測図 (1/3)	19

図 版 目 次

麦野C遺跡3次調査

- P.L. 1 (1) 調査区全景(西から) (2) 調査区全景(北から)
P.L. 2 (1) 住居跡1.2.土層(北から) (2) 住居跡1.2(北から)
 (3) 住居跡1.2(東から) (4) 住居跡2(東から)
 (5) 柱列1.2(東から)

南八幡遺跡6次調査

- P.L. 3 (1) 調査区全景(東から) (2) SC-01完掘状況(東から)
P.L. 4 (1) SC-02完掘状況(東から) (2) SC-03完掘状況(南から)
P.L. 5 (1) SK-01土層断面(南から) (2) SK-02土層断面(北から)
 (3) SK-03土層断面(南から) (4) SK-04完掘状況(北から)
P.L. 6 出土遺物
P.h.1 作業風景

第一章 南八幡遺跡、麦野C遺跡周辺の歴史的環境

南八幡遺跡、麦野C遺跡は、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置する。地理的には春日丘陵の東辺のほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷が入り込んでおり、数条の舌状台地状をなす。この舌状台地ごとに麦野A～C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡などに分けられているが、その地形的な境界は判然としない。今仮にJR南福岡駅、N R 雜餉隈駅周辺に展開する麦野A～C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡の総称として、麦野・雑餉隈遺跡群という名称を用いたい。以下この遺跡群の歴史的展開について略述する。

麦野・雑餉隈遺跡群で最も遡る遺物としては、麦野C遺跡1次調査地点で旧石器時代の石刃、剥片が出土している。後世の遺構の覆土からの出土である。

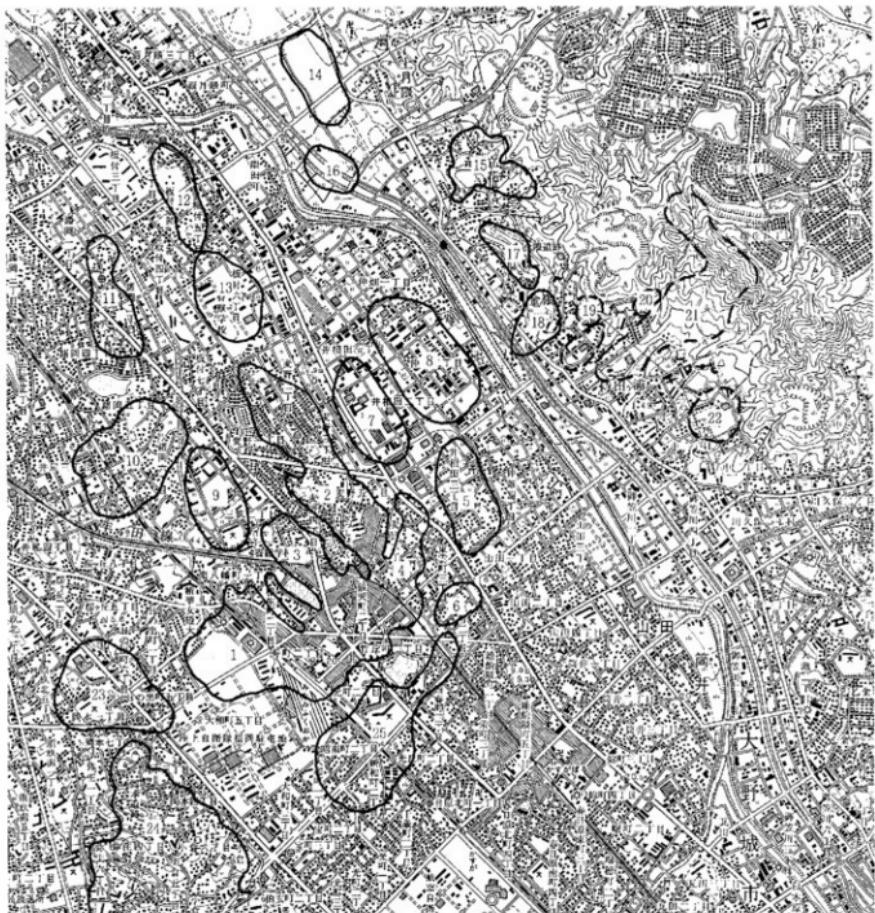
これに続く縄文時代の遺構、遺物についてもはっきりしない。麦野C遺跡3次地点（今回報告）では該期の石鏃が出土している。但しこれも後世の搅乱からの出土品である。遺構としては最近、麦野B遺跡3次調査地点で、該期の落とし穴ではないかという遺構が検出されているという。ただ時期を明らかにする遺物がまったく出土していないとのことなので、確定はできないようである。この他、縄文時代については晩期突堤文期に至るまで、確実な遺構、遺物に恵まれていない。

弥生時代に入ると、遺構、遺物とも増加が見られる。既に前期段階には、雑餉隈5次地点から住居跡（と考えられる方形土壙）、方形の貯蔵穴等が検出されている。中期段階にも同じく雑餉隈5次地点から、円形の住居跡が検出されている。住居の中には径8mほどの比較的大形のものを含み、また須玖遺跡群、岡本遺跡群にも近いことから、比較的規模の大きい拠点集落があった可能性もある。後期には雑餉隈5次地点では遺構が見られなくなり、他の地点でも遺構が希薄であるが、南八幡遺跡5次地点では、方形の住居が検出されている。

古墳時代に入っても遺構、遺物は不明な点が多い。とくに前期、中期の遺構、遺物は全くといつていいほど見られない。後期に入ると、南八幡遺跡2次、3次地点で住居跡が検出されている。隣接する調査区である2次、3次地点合わせて7期の住居が見つかっており、一定の広がりを持つ集落が展開していたことが推測される。しかしこの集落は奈良時代の大規模な集落には直接つながっていないようである。

7世紀末から8世紀にかけては大きな画期である。雑餉隈遺跡9次地点では7世紀末ないし8世紀初頭に、方形の配置を持つ大形建物群が現れる。その規模と配置は官衙的性格を思わせるものがある。8世紀中頃から後半に至ると集落は遺跡群全域で爆発的に増加する。各遺跡群どの地点を掘っても、該期の住居に当らないことがないと言っても過言ではない。これらの住居は例えば雑餉隈遺跡5次、8次地点合わせて5200m²の中に56基と、かなりの高密度で分布する。当然遺跡全体としては粗密はあつたろうが、それにも関わらず該期の村落景観は相当壯觀なものがあったと想像される。この集住の契機としては大宰府、水城、大野城などの国家的規模の土木事業ないしはその維持、營繕に関するものと推測していたが、雑餉隈遺跡9次地点の大形建物の検出により、その可能性は高まっただように思われる。但し、8世紀後半にはこれら国家的建築物の創建はほぼ終息していたであろうから、そのための集住とは考えがたい。

なおこれらの集落は9世紀に下る物はほとんど見られない。遺跡群内では麦野A遺跡3次調査で井戸が1基見つかっている程度である。その後の中世前半期も遺構は希薄であるが、中世後半期では麦野A遺跡1次地点で、15世紀代の集落が検出されている。

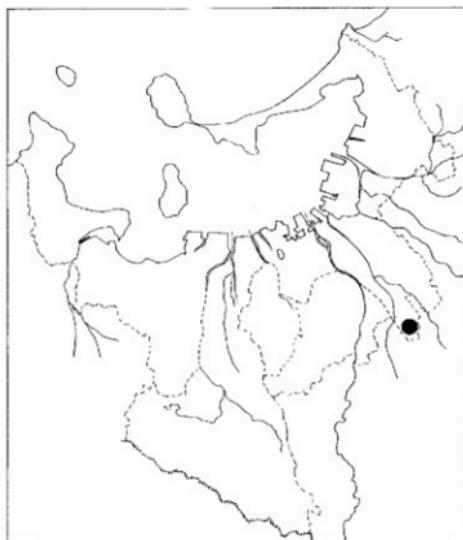


1. 南八幡遺跡 2. 麦野A遺跡 3. 麦野B遺跡 4. 麦野C遺跡 5. 井相田A遺跡
6. 井相田B遺跡 7. 井相田C遺跡 8. 仲島遺跡 9. 三筑遺跡 10. 笹原遺跡
11. 諸岡B遺跡 12. 板付遺跡 13. 高州遺跡 14. 下月梨C遺跡 15. 立花守A遺跡
16. 立花寺B遺跡 17. 余張遺跡 18. 彰ヶ浦遺跡 19. 彰ヶ浦古墳群
20. 堤ヶ浦古墳群 21. 持田ヶ浦古墳群 22. 御陵古墳群 23. 犀久遺跡群
24. 岡本遺跡群 25. 雜割原遺跡

Fig. 1 調査区周辺の遺跡 (1 : 25,000)

麦野C遺跡

第3次調査 ——



遺跡略号 MGC-3
調査番号 9604

例　言

1. 本章は医院建設に先だって、福岡市教育委員会が1996年1月8日～1月19日にかけて行なった麦野C遺跡第3次調査の報告書である。麦野C遺跡としては361集につづき2冊目の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本章で使用する方位は磁北である。
4. 本章で使用した遺構実測図は宮井善朗、西村智道（現太刀洗町教育委員会）、井上繩子（現福岡市教育委員会）、野田和美、岡部裕子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本章で使用した遺物の実測図は宮井の他西村智道、井上繩子が作成した。また製図は宮井の他林山紀子の協力を得た。
6. 本章使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本章の執筆、編集は宮井が行なった。

第二章 麦野C遺跡第3次調査

1. 調査に至る経緯

1995年12月15日付けで、戸早雅弘氏より、医院併用の自宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である麦野C遺跡内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて96年3月19日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、自宅併設ということから、一部補助金の対象として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1996年4月8日に着手し、4月19日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝 第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野基基

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 森園弘子 平田浩美 森山キヨ子
石川洋子 鶴山治子

調査補助 野田和美 関部裕子 西村智道（現太刀洗町教育委員会） 井上繩子（九州大学、現福岡市教育委員会）

整理作業 西村智道 井上繩子 大石加代子 林由紀子 太田順子 武田祐子

また調査時には戸早雅弘氏に、多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9604		遺跡番号	MGC 3	
調査地地番	福岡市博多区銀天町3丁目14				
開発面積	472.07m ²	調査対象面積	320m ²	調査面積	242m ²
調査期間	1996年4月8日～4月19日	分布地岡番号	12 0050		

3. 調査の記録

今回の調査は、242m²という狭い面積である。検出した遺構は、重複した住居跡2基、楕円形の浅い土壇2基、溝1条、ピット等である。ピットは列状をなすものも数列見られるが、建物を検出するには至っていない。遺構はいずれも奈良時代に属するものと考えられる。地山である鳥栖ローム層は、東側に向かってかなり急に傾斜しており、その上層に包含層が認められる。包含層出土の土器も、奈良時代に属するものであろう。

住居跡1、2(Fig. 5) 調査区の西辺の中央付近で検出した住居跡である。検出時には1基の住居と考えたため、覆土から出土した遺物の取上げは分離されていない。ほぼ床面に近くなつて、硬化面が段をなすことが判明し、2基の住居の切り合いであることが確認された。しかし覆土の土層観察によつても住居跡1の東側の壁ははっきりしない。住居跡1は西側の住居で、住居跡2を切る。床面は

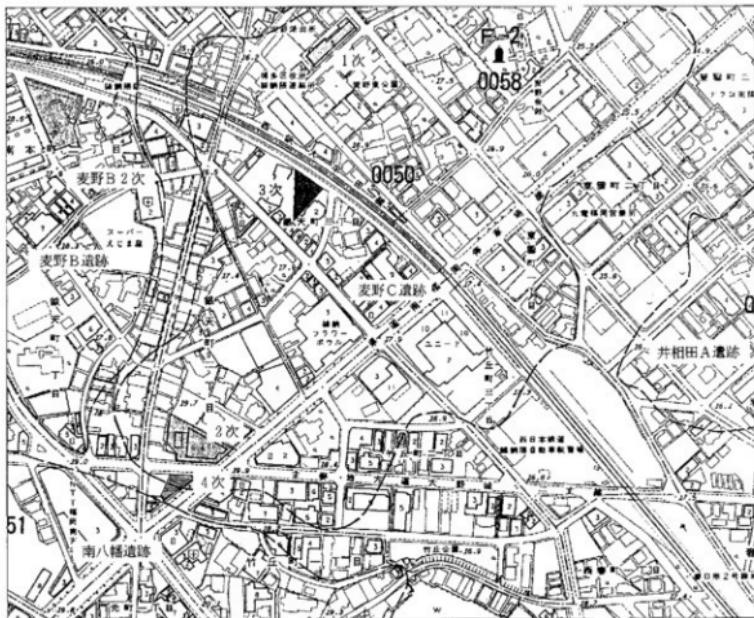


Fig. 2 調査地点図 (1/4000)

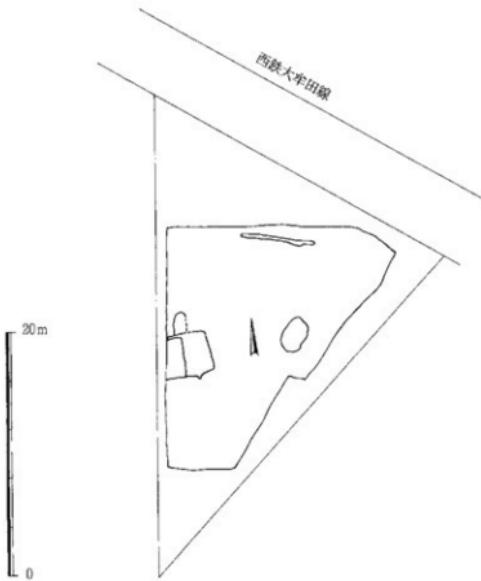


Fig. 3 調査区位置図 (1/400)



Fig. 4 遺構配置図 (1/200)

住居跡2より高いため、住居跡2と切り合う部分はそれだけ厚い貼床をしている。東壁の位置ははっきりしないが、貼床の東限から程遠くない位置に想定される。土層では貼床の東限の位置に壁溝とも考えられる落ちこみが見られるが、それからの壁の立上りは明確ではない。北壁については、壁溝が2重になる部分があり、いずれかが住居跡1の壁溝と考えられる。図では住居跡2の北壁のつながりを考慮して、住居跡1の壁溝を内側と想定した。この復元では、一辺3.2mほどの方形となり、ほぼ住居跡2と同じ規模になる。住居跡2は一辺3.2mほどの方形を呈する。主柱穴は検出されない。南側にカマドを持つ。カマドの煙道が住居跡外へスロープ状に張り出している。カマド本体は破壊されており、白色粘土が散乱するのみである。10cmほどの貼床をした後に壁溝を切っている。

出土遺物(Fig. 6) 前述したような事情で、住居跡1と2の遺物は分離して取り上げられていない。とくに住居跡1に確実に属する遺物は不明である。確実に住居跡2に属する遺物のみ明記することとして、その他について一括して述べる。Fig. 5の1～4の須恵器、5の土師器が住居跡1、2出土である。1～4は高台付の坏である。いずれも底部から体部が緩やかに立ち上がる。直線的に伸びる1のようなものと、やや外反する2、4のようなものがある。高台は断面方形で、外傾して取り付く。5は上師器の口縁部である。内面の口縁部以下にケズリを施し、明瞭な稜が立つ。6～12は住居跡2に伴う遺物である。6、7はカマド近くの床面から出土した遺物である。6は高台付の坏。底部は丸みを帯び、体部は緩やかに立ち上がる。高台は低く、外傾して取り付く。7は高台のない大形の坏。底部と体部の境付近に回転ヘラ削り後、焼成前の条線がある。8、9、12は上師器の小形版。10、11は瓶である。10は口縁部で、内面は削り。口縁端は直線的に伸びて徐々に薄くなる。11は把手である。出土した土器を見ると、大きな時期幅は認められない。

土塙3 (Fig. 5) 住居跡2の北側で検出した。住居跡2に切られる。梢円形を呈する浅い土塙であ

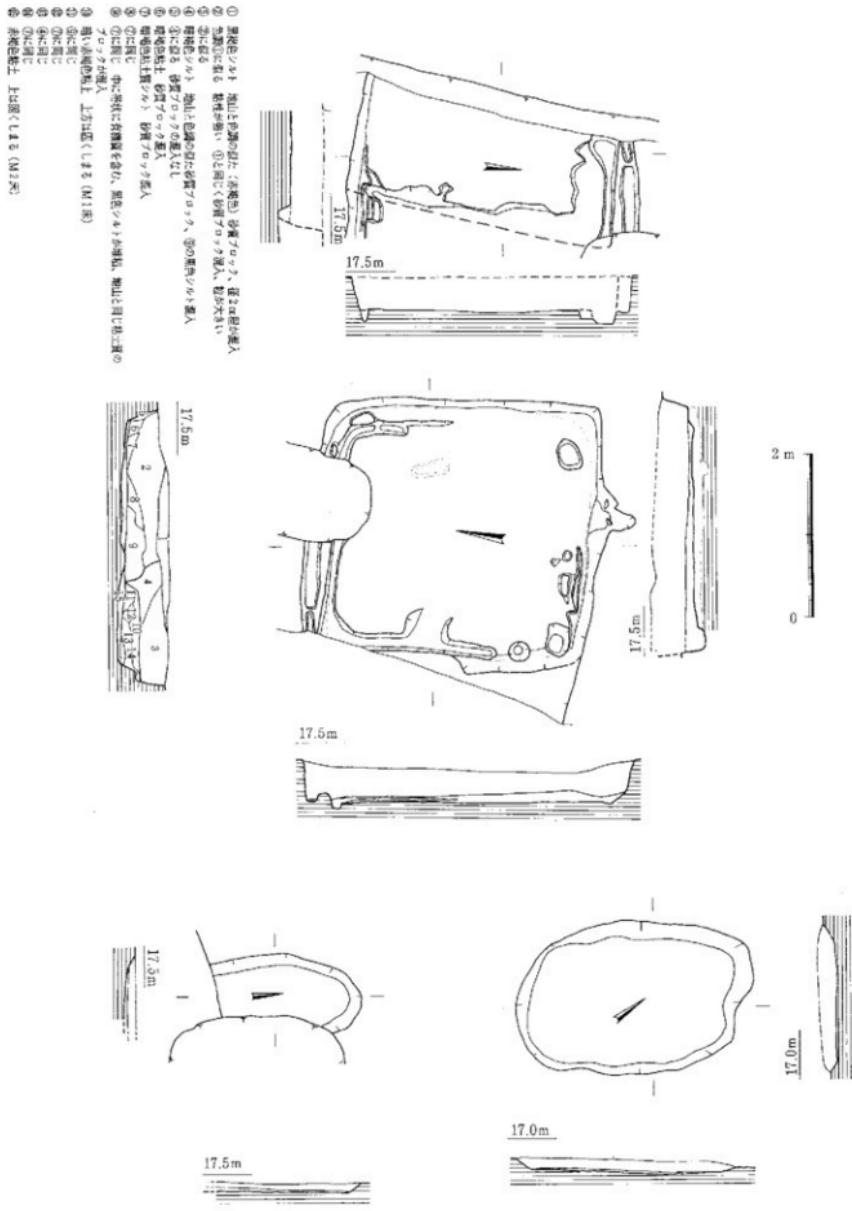


Fig. 5 検出遮構実測図 (1/60)

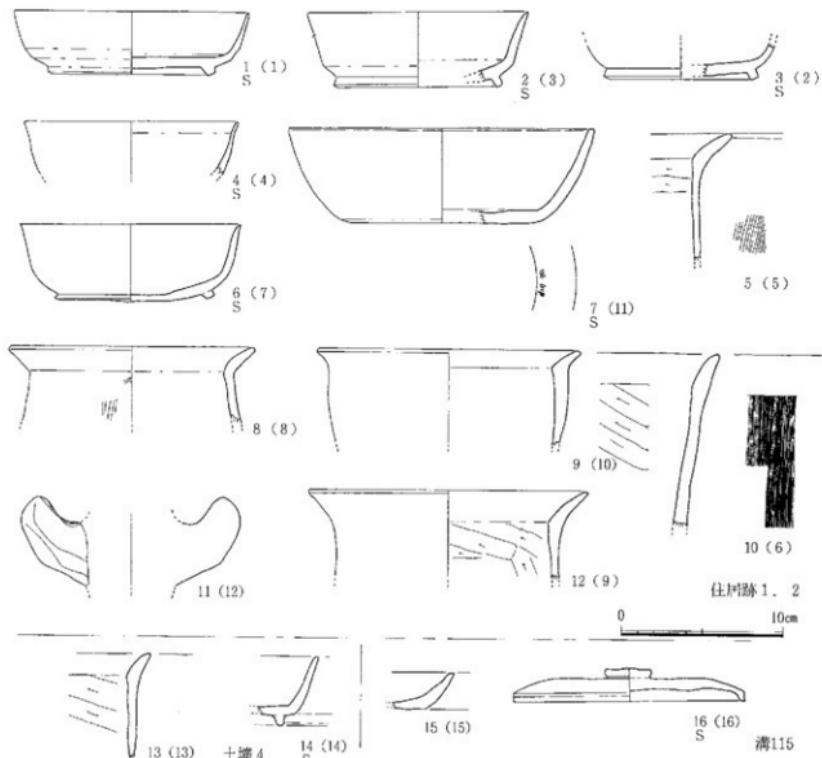


Fig. 6 各遺構出土遺物 (1 / 3)

る。長1.8m以上、幅1mほどに復元される。現状での深さは10cmほどである。性格は不明であるが、後述する土壙4と規模、形状が類似しており、同様な性格の遺構と考えられる。出土遺物は小ボリ袋一袋と少なく、また図化に耐え得ないが、外面ハケメ、内面削りの土器器底部片が出土している。

土壙4(Fig. 5) 調査区の東端で検出した。梢円形を呈する浅い土壙である。長2.7m、幅1.8mを測る。現状での深さは15cmほどである。土壙3よりやや大形と言えようか。

出土遺物(Fig. 6) 1~3は小形の甕の口縁部である。口縁部はほとんど外反しない。14は高台付の环片である。高台は踏張り気味に外反する。住居跡出土のものに比べて焼成もよく、成形も丁寧な観がある。土壙3が住居に切られることからも、この2基の土壙は住居より古いものと考えられる。

溝115(Fig. 4) 調査区北端で検出した。幅30cmほどの溝である。調査時の深さは5~10cmほどであるが、北端では若干表土を深く剥ぎ過ぎているので、現状での遺存は20cmほどと考えられる。延長は5.6m以上を測る。奈良時代に属する。該期のこのような浅く、幅狭で比較的延長の長い溝は、雜駄限遺跡5次、8次調査区に類例があり、そこでは延長50mに及んでいる。

出土遺物(Fig. 6) 15は明赤褐色を呈する土器器底部である。器面は荒れているが、外面は回転へ

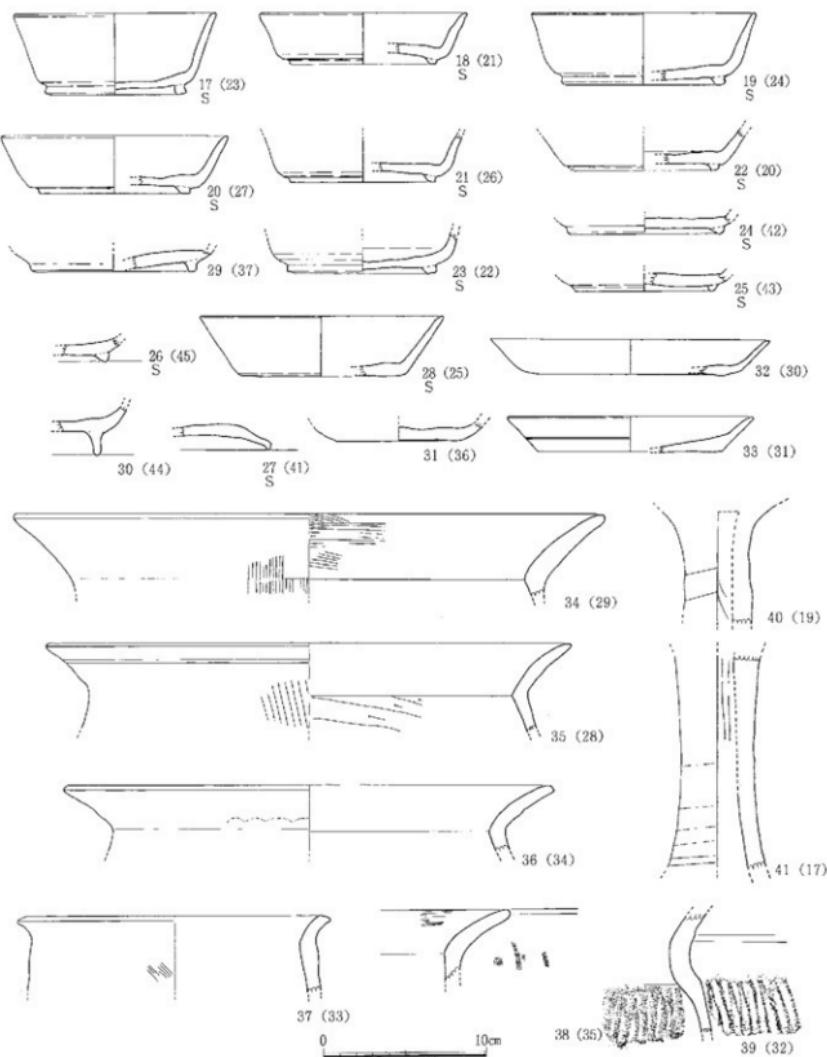


Fig. 7 包含层出土遗物 1 (1 : 3)

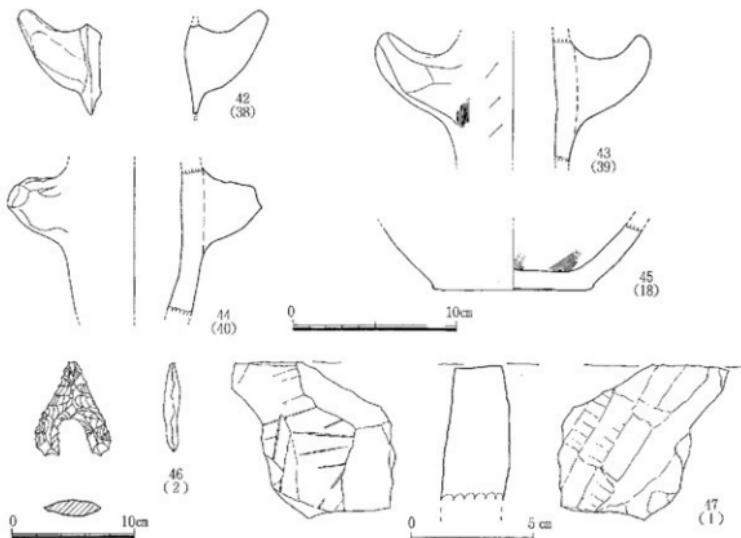


Fig. 8 包含層出土遺物2 (1/3 1/2)

ラミガキであろう。16は須恵器蓋である。つまみは径が大きく、平たい。口縁端部は強く屈曲する。天井部に回転ヘラ削りを施す。

ピット ピットは全体に散漫に検出しているが、詳細に見れば粗密がある。比較的集中しているのは、調査区南端部、上塙4の北側、調査区西北隅である。列をなすものも、図示したように数列見られるが、調査区内で建物として完結するものはない。柱列の中で、柱列3、4は建物の有力候補と考えられる。

包含層 調査区東北隅に、東側に向かって比較的急な傾斜を持って地山ローム面が落ちていく部分がある。おそらくそのまま谷部へと落ちていくのである。この斜面の上層に包含層が形成されている。

出土遺物(Fig. 7、8) 17から26は須恵器の高台付の环である。11径11cmほどの小形品(17、18など)と、14cmほどの中形品(19、20など)があり、また17のような深いものと、18のような浅いものがある。高台は低く、華奢である。27は蓋の口縁部片である。つまみ部分まで遺存がなく、有無は不明である。口縁端部は短く屈曲する。天井部はヘラ削りの後ナデを施す。28は高台の無い須恵器环である。体部は内外面とも回転ナデを施す。29は土師器の高台付环である。器面が非常に荒れている。30も土師器环、高い高台を持つ。内外面ともナデ調整。淡赤褐色を呈する。31は高台の無い土師器环底部。底部はヘラ切りの後未調整である。32、33は土師器皿である。33の底部はヘラ切りの後ナデを施す。34から38は土師器の壺である。34、35、36、38はいずれも大きく開く口縁部を持ち、胴部内面をヘラ削りする。38は外面に模が付着している。37は器形が異なるが、内面の屈曲部以下をヘラ削りしており、やはり小形の壺であろう。39は玄界灘式製塙上器と考えられる。外面に目の粗い擬格子叩き、内面に平行線文の当て具痕が見られる。40、41は土師器高环である。色調や調整はよく似ている

が別個体である。外面は回転ヘラ削り、内面には絞り痕が見られる。明赤褐色を呈するが、焼成は硬質で、須恵器とするべきかもしれない。Fig. 7 の42、43、44は土師器の把手である。大きく上方へ反る42、43の様なものと、短く水平な44のようなものがある。45は土師質の摺鉢で、中世以降のものと考えられる。上層からの混入であろう。46、47は石製品である。46は調査区内の攤乱から出土した石鏃である。縄文時代に属するものと考えられる。遺跡周辺では該期の遺構は検出されていないが、最近南本町で行われている友野B遺跡3次調査において、縄文時代の落とし穴ではないかとされる遺構が検出されているという。縄文時代の遺物が出土していないので時期比定には疑問が残るが、遺跡周辺に縄文時代に遡る生活遺構が存在した可能性がでてきたことになろう。47は包含層出土の滑石製品。石鏃の口縁部破片か。内外面に削りの痕が見られる。外面は平滑であるが、内面は凹凸が著しい。45と同様上層からの混入品であろう。

4. 小 結

今回の調査では奈良時代を中心とした集落のごく一部を検出した。従ってこの遺跡のみでまとめを行っても、余り大きな意味があるとは思えないが、気付いた点を二、三記しておきたい。

まず數少ない遺構ながら、切り合いと、出土遺物により、少なくとも二時期に分かれる可能性がある。前段階は土壌3、4、溝105からなる遺構群である。土壌3が住居跡に切られること、土壌、溝出土の遺物が、住居のものよりやや古い特徴が見られることによる。後段階は住居の時期で、更に切り合いから新旧2段階に分かれるが、出土遺物からは時期差は小さいものと考えられる。遺物については牛頭等の成果を参考にすると、前段階が8世紀の前半頃、後段階が8世紀中頃ないし後半頃に比定できようか。

近年友野、雜餉隈周辺の遺跡群の調査が急増しており、調査成果の蓄積も増えてきている。現在までの状況を概観すると、南八幡遺跡1～3次調査のように古墳時代から集落が続く地点もあるが、多くは奈良時代、それも初頭ではなく、やや時期が下がった頃から住居が急増するようである。またほとんどの集落で、平安時代まで継続する例もないようである。その背景には興味を感じるが、現在雜餉隈遺跡5次、8次、9次調査の60基近い住居の資料が未検討であるため、改めて考察することしたい。



(1) 調査区全景（西から）



(2) 調査区全景（北から）



(1) 住居跡1、2 土層



(2) 住居跡1、2 (北から)



(3) 住居跡1、2 (東から)



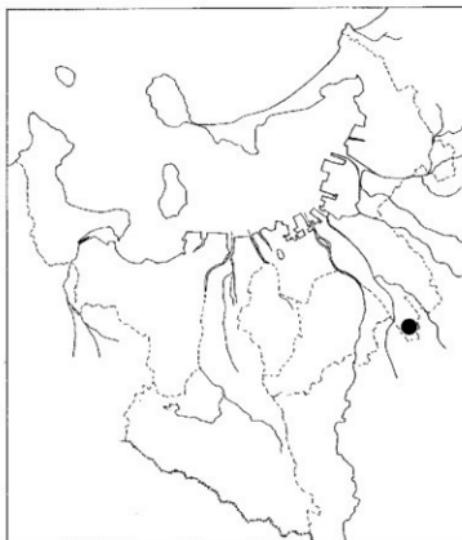
(4) 住居跡2 (東から)



(5) 柱列1、2

南八幡遺跡

—— 第6次調査 ——



遺跡略号 MHM-6
調査番号 9508

例　　言

1. 本章は、1995年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した南八幡遺跡第6次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
2. 本章に使用した遺構の実測は加藤隆也が、遺物の実測図は加藤、入江のり子が行った。製図は加藤、入江が行った。
3. 本章に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。
4. 遺構の呼称は記号化し竪穴住居をS C、土坑をS K、柱穴をS Pとした。
5. 本章で用いる方位は全て磁北である。また、遺構レベルは那珂南小学校（L -20.979m）から移動した。
6. 本章の執筆は加藤が行った。
7. 本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9508		遺跡番号	MHM 6	
調査地地番	博多区元町1丁目19-4		分布地図番号	麦野12	
開発面積	349.03m ²	調査対象面積	349.03m ²	調査実施面積	206m ²
調査期間	1995年5月16日～5月25日				

第三章 南八幡遺跡第6次調査

はじめに

調査に至る経緯

1995年3月3日、博多区元町1丁目19-1における共同住宅の建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの南八幡遺跡群の東側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1995年5月2日に試掘調査を実施した。現況は宅地であり、調査の結果、地表直下の鳥柄ローム上面にて遺構が確認された。よって、面積349.03m²を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1995年5月16日～同年5月25日まで行った。

調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前）町田英俊（現）

調査総括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口謙治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基

調査担当 埋蔵文化財課第2係 加藤隆也

試掘調査 山崎龍雄 池田祐司

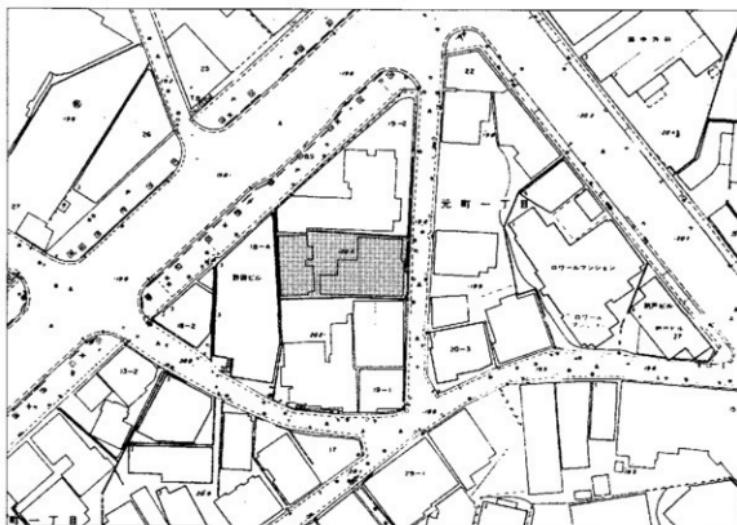


Fig. 9 調査地点位置図 (1/1000)

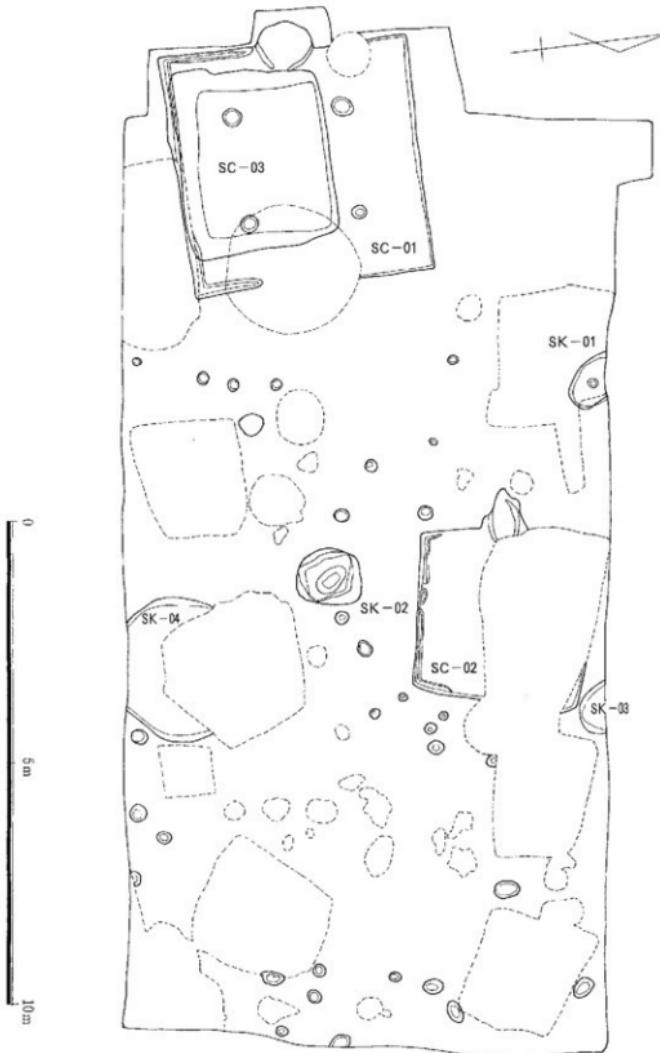


Fig. 10 南八幡遺跡群第6次調査区遺構配置図 (1/100)

南八幡遺跡群の既調査

1次調査（1979年調査、南八幡2丁目8-5）

古墳時代の溝が調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第489集）

2次調査（1984年調査、寿町2丁目119-1）

古墳時代の堅穴住居5基、土坑1基、奈良時代の堅穴住居4基、土坑2基、掘立柱建物4棟が調査された。また、ローム層から黒曜石剝片が出土している。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集）

3次調査（1896年調査、寿町2丁目4-12）

古墳時代の堅穴住居2基、奈良時代の堅穴住居4基、土坑4基、掘立柱建物4棟が調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第181集）

4次調査（1991年調査、寿町2丁目86番1、85番2）

堅穴住居状遺構3基、掘立柱建物13棟検出された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第277集）

5次調査（1994年調査、寿町2丁目84番、85番1）

弥生時代後期の堅穴住居が1基調査された。（福岡市埋蔵文化財調査報告書第441集）

調査の記録

1) 堅穴住居（SC）

今回の調査において3基の堅穴住居を調査した。

SC-01 (Fig.11, PL.3)

調査区西側に位置する。住居の東側は櫛状により切られる。5.0m四方の方形の平面形を呈する。住居の四隅はほぼ直角におれ、壁高は70cmを測る。床面南側にのみ浅い壁溝がみられた。西壁やや北よりも白色粘土を貼り付けたカマドがみとめられ、住居内の床面には焚口とみられる浅い楕円形の窪みが検出された。また、カマド付近の床面にはカマドに使った白色粘土塊が散乱していた。主柱穴は四本で、深さは24~64cmを測る。年代は遺物より8世紀中頃から後半とみられる。

出土遺物 (Fig.12, PL.6)

1は須恵器の無高台の环である。口径12.8cm、底径8.2cm、器高4.0cmを測る。底部は丸みをもち、体部は直線的に外上方にのびる。2~4は須恵器の皿である。2は口径18.0cm、底径14.2cm、器高2.3cmを測る。底は平坦である。3は口径18.0cm、底径14.6cm、器高2.7cmを測る。底は丸みを帯びている。4は口径18.0cm、底径15.2cm、器高2.6cmを測る。底は丸みを帯びている。5~9は須恵器の高台付环である。5は口径12.6cm、底径6.2cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのびる。6は口径12.6cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境は丸く不明瞭である。体部は直線的に外上方にのび、口縁部はやや外方にひらく。7は口径11.8cm、底径7.0cm、器高3.6cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、体部は直線的に外上方にのびる。8は口径13.4cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境は丸く不明瞭である。体部はわずかに内湾する。9は口径13.7cm、底径8.2cm、器高4.6cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのびる。10は須恵器の蓋である。口径16.8cm、器高2.7cmを測る。天井部は回転ヘラ削りである。11~19は須恵器の环蓋である。11は口径16.2cm、器高2.4cmを測る。人井部外縁の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。12は口径13.8cm、器高1.6cmを測る。犬井部は低く水平で円筒形状のつまみがつく。体部

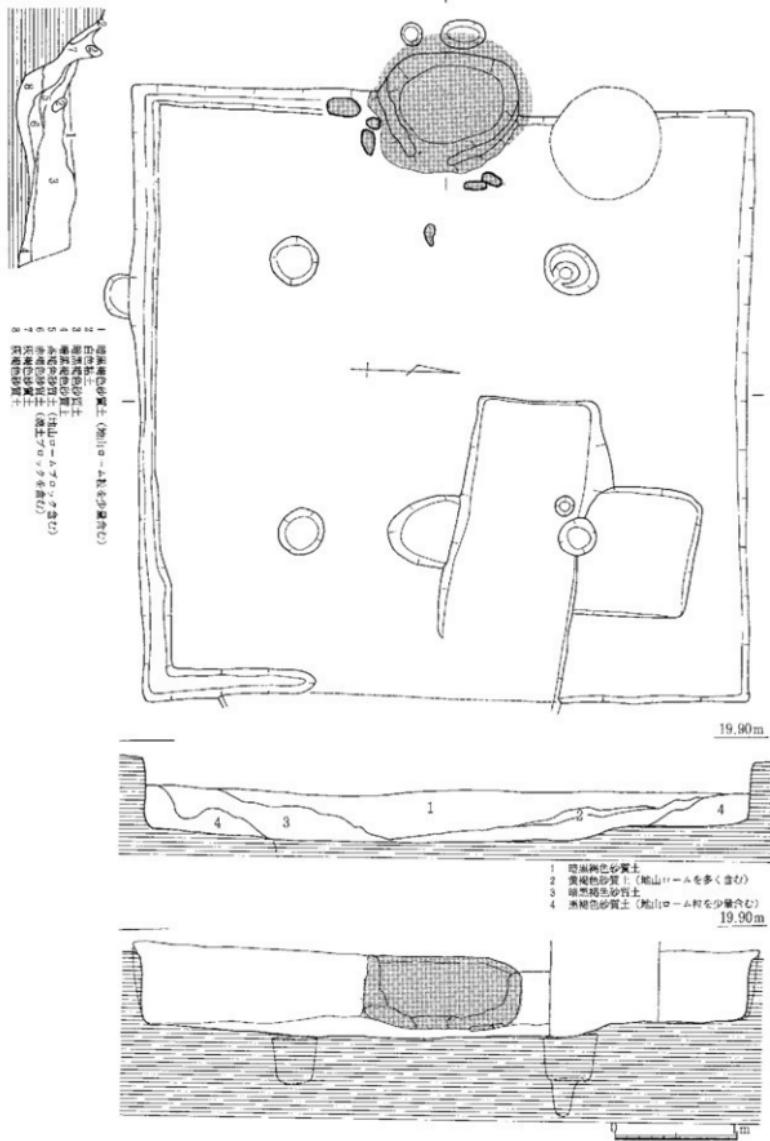


Fig. 11 SC-01 実測図 (1/40)

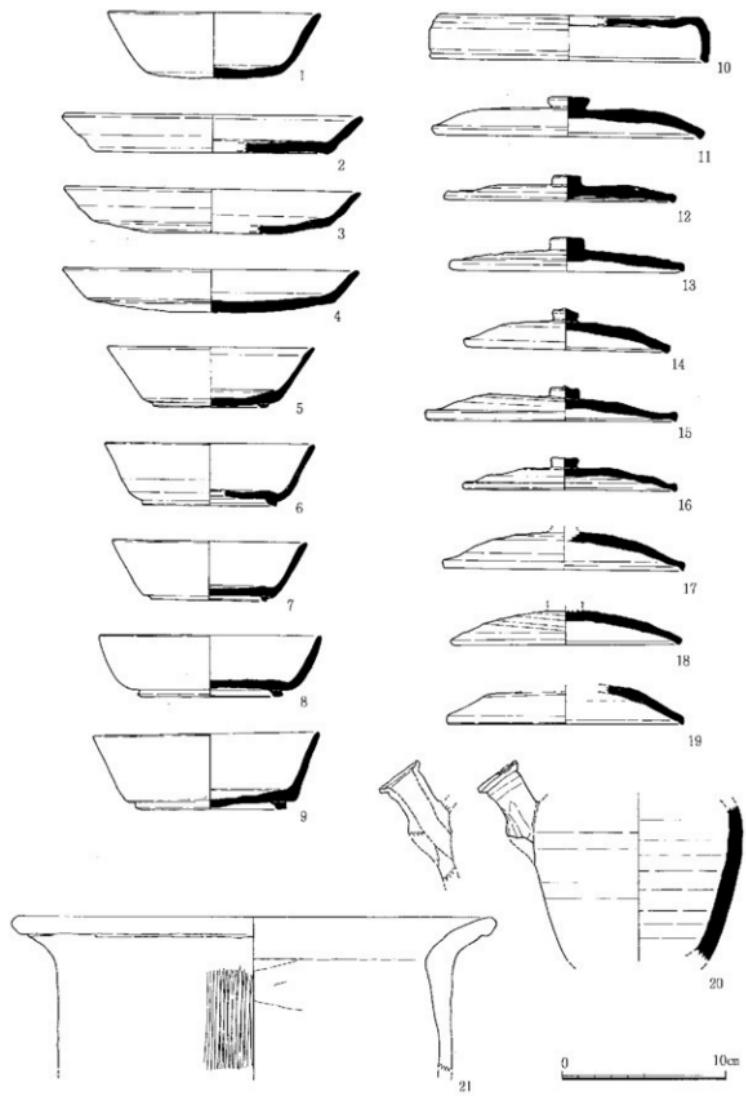


Fig. 12 SC-01 出土遺物 (1/3)

と口縁部の内側の稜は不明瞭である。13は口径14.2cm、器高2.1cmを測る。天井部は低く水平で円筒形状のつまみがつく。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。14は口径12.3cm、器高2.5cmを測る。天井部は高く、丸味をもつ。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。15は口径15.0cm、器高2.1cmを測る。天井部外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっており、円筒形状のつまみがつく。口縁部の断面は三角形に近い。16は口径12.8cm、器高2.0cmを測る。天井部外面の約2/3に回転ヘラ削りをおこなっている。口縁部の断面は三角形に近い。17は口径14.6cm、器高2.3cmを測る。天井部は高く丸味をもち、外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。18は口径13.8cm、器高2.1cmを測る。天井部は高く丸味をもち、外面の約2/3に回転ヘラ削りをおこなっている。体部と口縁部の内側の稜は不明瞭である。19は口径14.4cmを測る。天井部外面の約半分に回転ヘラ削りをおこなっている。20は須恵器水瓶の軍持である。添水口の口径は3.0cmを測る。21は甕である。口径23.8cmを測る。器面調整は外面がハケ目、内面はヘラ削りである。

SC-02 (Fig.13, P.L.4)

調査区北側に位置し、北側半分を擾乱に切られる。一辺3.5mの方形の平面形を呈すると考えられる。残存する深さは約40cmを測る。床面の壁際には幅10cm前後、深さ3~4cmの壁溝があがる。西壁の中央に白色粘土を貼り付けたカマドがみられ、煙道は緩やかにのびている。床面上には焚口の浅い窪みが検出され、焼土、白色粘土が広い範囲にみられた。明確な主柱穴は検出されなかったが、床面の隅に直径30cm前後、深さ5~10cmの浅いビットが検出されている。年代は遺物より8世紀前半から中頃とみられる。

出土遺物

須恵器の壺蓋・壺身、大型容器、土師器の甕の口縁部などの破片が埋土から出土しているが、風化できるものはなかった。須恵器高台付壺の高台断面は四角形で細く、底部と体部の境は丸く稜は不明瞭である。甕の破片の器面調整は外面がハケ目、内面はヘラ削りである。

SC-03 (Fig.14, P.L.4)

SC-01の床面の下から検出された遺構である。南北3.2m、東西3.6mの長方形を呈する。床面から遺構検出面までは1.15mを測る。床面では土柱穴等の建物に伴うとみられる柱穴やカマドに使用される白色粘土塊等は検出されなかった。床面上に葉のような植物遺体がみられたが取り上げることはできなかった。年代は8世紀中頃であろう。

出土遺物 (Fig.16, P.L.6)

22は口径12.2cm、底径8.3cm、器高3.1cmを測る無高台の甕である。底部は平坦で、体部はわずかに内湾気味に外反する。23~25は須恵器の蓋壺の身である。23は底径9.0cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境は丸く稜は不明瞭である。体部は直線的に外上方にのびる。24は底径8.2cmを測る。高台の断面は四角形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。25は口径16.4cm、底径9.4cm、器高4.5cmを測る。高台の断面は逆台形を呈し、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は内湾気味に外反する。

2) 土坑 (SK)

今回の調査において4基の土坑を調査した。SK-1~3の3基は無遺物であった。

SK-01 (Fig.15, P.L.5)

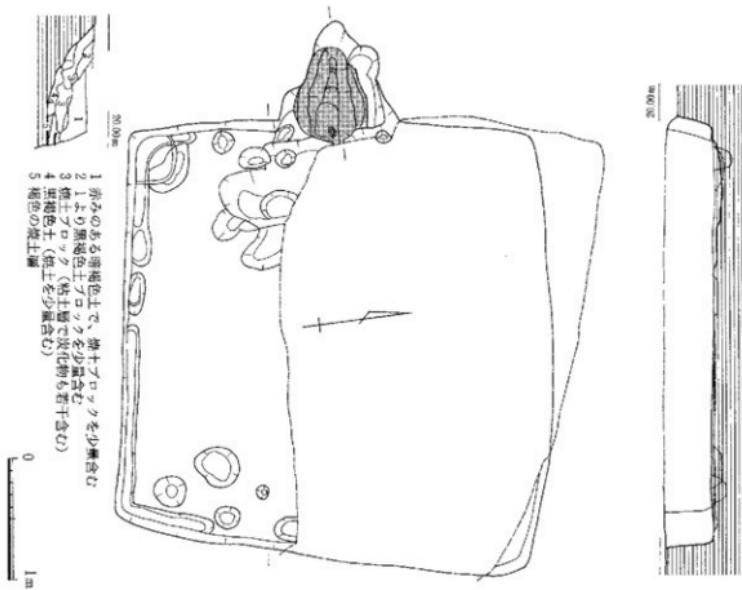


Fig. 13 SC-02 実測図 (1/40)

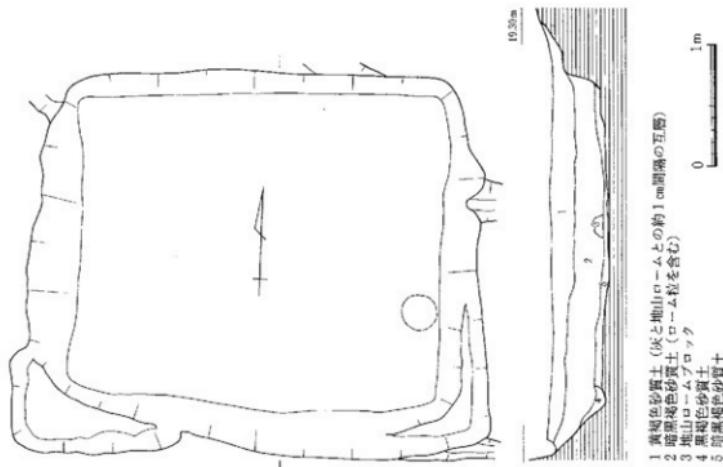


Fig. 14 SC-03 実測図 (1/40)

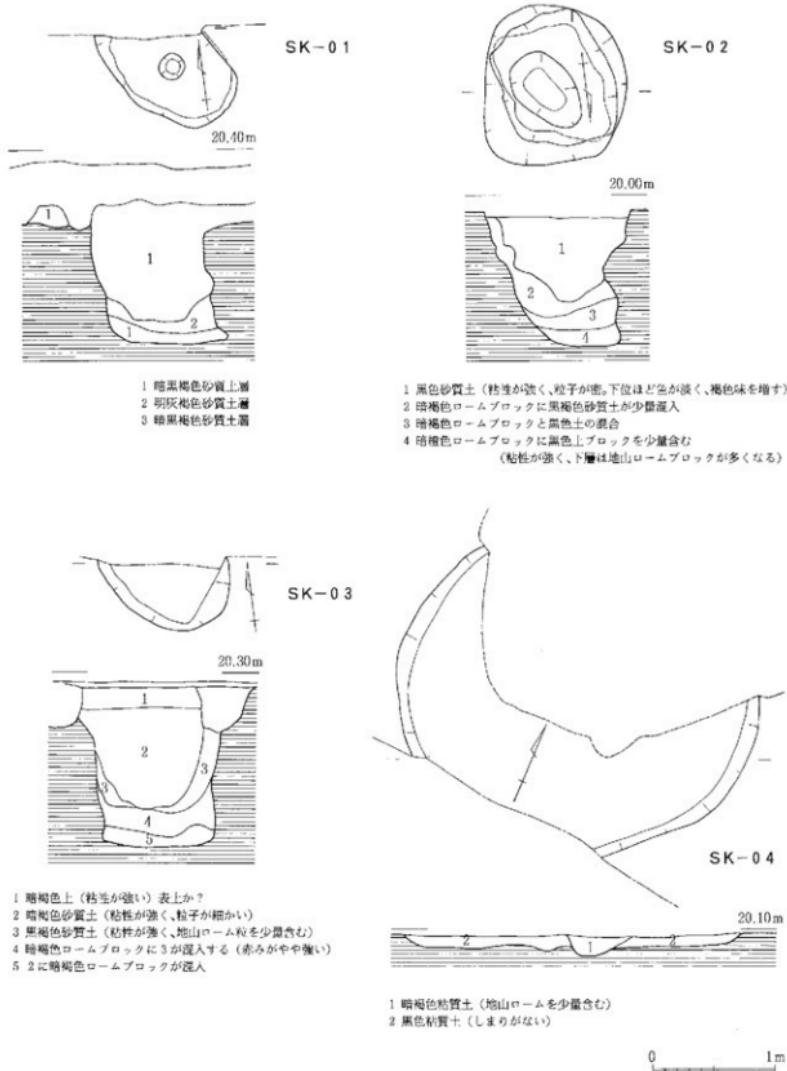


Fig. 15 土坑 (SK) 実測図 (1/40)

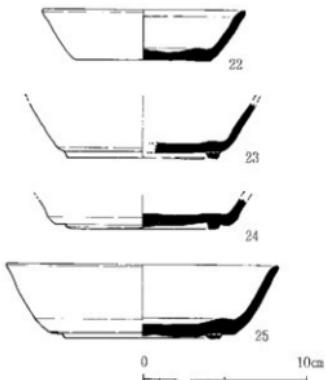


Fig. 16 SC-03出土遺物実測図(1/3)

調査区北端で検出され、遺構は調査区外へのびる。平面形は長楕円形を呈し、短軸0.8m、深さ1.15mを測る。壁面は下方が抉れ、底面に直径20cm、深さ5cmの浅い小穴がみられる。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

SK-02 (Fig.15, PL.5)

調査区中央で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.2m、深さ1.1mを測る。壁面の上方は崩れて広く、下方は抉れている。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

SK-03 (Fig.15, PL.5)

調査区北端で検出され、遺構は調査区外へのびる。平面形は長楕円形を呈すると思われ、深さ1.15mを測る。埋土は自然堆積の状況を示しており、遺物は出土していない。

SK-04 (Fig.15, PL.5)

調査区南端で検出され、遺構は南側調査区外へのびる。平面形は直径3.0mの円形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかである。遺構の年代は遺物から8世紀前半とみられる。

出土遺物 (Fig.17, PL.6)

26は高台付環である。口径12.2cm、底径6.8cm、器高3.8cmを測る。高台は細く、底部と体部の境に明瞭な稜がつく。体部は直線的に外上方にのび、口縁部は外反する。

3) 小結

ローム上面にて確認された遺構の調査終了後、調査区中央部に2×2mのグリッドを2ヶ所設定して地山の鳥柄ローム層を20~30cm掘削を行ったが遺物、遺構等は検出されなかった。今回の調査地点内において旧石器時代人の活動はみられない。

SK-01, 02, 03について 深さが1mをこえる遺構であるが、遺物は検出されなかった。遺構断面の観察では覆土が3基とも黒褐色土であり、遺構の上部は緩やかに開いている。この2点から意図的に埋められることなく長時間開口していたことが想定される。さらに、平面形とも併せて「落し穴」であるとかがえる。

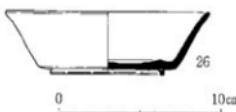


Fig. 17 SK-04出土遺物実測図(1/3)

小田和利氏の分類に従うとSK-01は底面に浅いものであるがビットがあり、平面は長方形を呈することからIaにあたる。SK-02は平面形が不定形であるが、掘削時には方形ないしは、長方形に掘られたであろうと思われる。よって、IIIbにあてる。SK-03は調査区端に位置するため平面形は特定できないが方形ないし長方形を呈すると考えられる。

つづいて配列状態であるが、遺構から遺物が出土していないため3基が同時期に掘られたものであるかどうか決定できない。ただし、01と03には方向性に一致がみられる。仮にこの2基が同時期のものであるなら、並列タイプの受動的獵法に関わる遺構であるといえる。

SC-01とSC-03について SC-03の性格は、上面のSC-01には明瞭なフラットな床面がみられることと、主柱穴はこの住居の覆土上面から掘り込まれていることから、01の屋内施設とは考えられない。しかし、住居南側の辺の方向が2基とも一致すること、03埋土には意図的な埋め戻しが土層断面にみられることから、この住居は01に先行する建物で、住居の拡張のための建て替えを行っていると考える。

最後に、今回の調査は面積的には狭いものであったが、落し穴、奈良時代の竪穴住居など多くの成果を得ることができた。近年の周辺の調査においても落し穴や竪穴住居が調査されており、その配列状態や集落の規模等も今後の調査により明らかになることを望みたい。

(参考文献)

『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書-5-』 福岡県教育委員会 1991



Ph.1 作業風景



(1) 調査区全景（東から）



(2) S C - 0 1 完掘状況（東から）



(1) SC-02 完掘状況（東から）



(2) SC-03 完掘状況（南から）



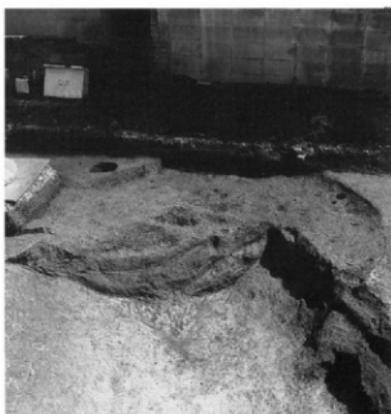
(1) SK-01 土層断面（南から）



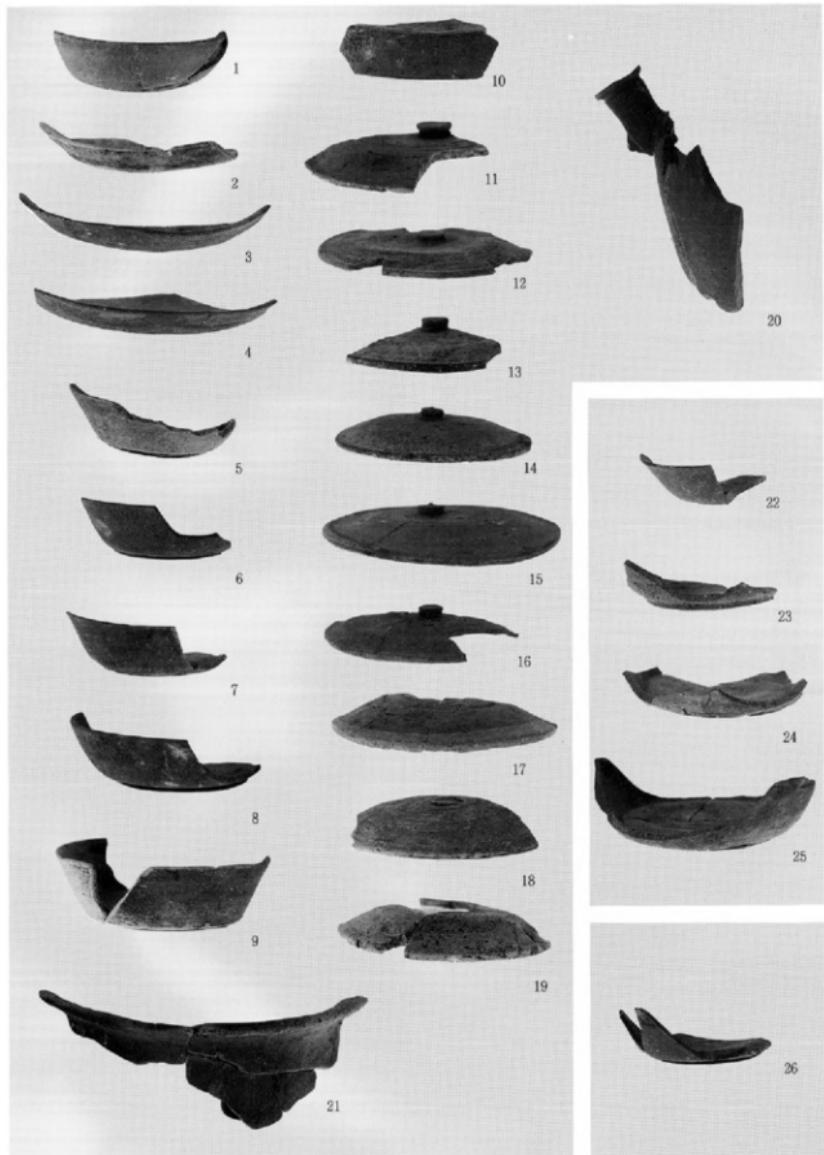
(2) SK-02 土層断面（北から）



(3) SK-03 土層断面（南から）



(4) SK-04 土層断面（北から）



出 土 遗 物

麦野 C、南八幡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第501集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 梶松古堂印刷

南麥野
八儀 C

第第
63
次次
調查

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第501集

1997

福岡市教育委員会